

OECD 統計局は、11月15日、ウェル・ビーイング（Well-being：幸福度）に関する報告書、How’s life? 2017 を公表しました。

本報告書は、2011年以降、隔年で公表、11 カテゴリー※のウェル・ビーイング指標の状況が分析されています。今回の報告書では、最近の動向に加え、ウェル・ビーイングの不平等の計測、移民のウェル・ビーイング、及びガバナンスとウェル・ビーイングについて、それぞれ検討する章が設けられています。概要は以下の通りです。

※ 所得と富、仕事と収入、住宅、健康、ワークライフバランス、教育とスキル、社会的つながり、市民参加と政府、環境、個人の安全、主観的幸福度。

生活は良くなった部分もあるが、ウェル・ビーイングのいくつかの側面は遅れている

世界金融危機は人々の生活に深く長期にわたる影響を与えた。第1章では、2005年以降のウェル・ビーイングの変化を確認し、人々はいくつかの点では豊かになっているが、世界金融危機以降、その進歩は鈍化し、いくつかの点では後退していることを示している。家計所得や平均賃金の増加、基本的な衛生施設へのアクセスがない者の割合の低下などがみられる一方、長期失業率の上昇や投票率の低下などがみられる。

不平等の様々な顔

不平等は人々の生活の全ての側面に関係する。第2章では、いくつかのレンズ、例えば、分布の頂点と底の差、及びジェンダー、年齢、教育によるウェル・ビーイングの違いを通して、ウェル・ビーイングの不平等を考察している。ある社会は他の社会よりも平等である一方、全 OECD 加盟国で、不平等さが高い部分と低い部分がある。また、不平等は相互作用し、不利な点を組み合わせる。例えば所得の上位 20% に属する人々は、高い生活満足度を回答する可能性が下位 20% に属する人々の 2 倍となる。

移民はウェル・ビーイングにおいて複数の課題に直面する

平均して OECD 加盟国の人口の 13% が海外で生まれている。第3章では、新たな拠点での生活が、移民のウェル・ビーイングに様々な課題をもたらすことを示している。移民は自国出身者に比べて労働条件が悪く、生活水準の低さにも直面している。また、大部分の OECD 加盟国において、移民の回答からは、より悪い健康状態、より低い社会的サポート、より低い主観的ウェル・ビーイングが見て取れる。

公共機関と人々の間のギャップ

OECD 加盟国における投票率の一律な低下は長年の懸案事項となっている。第4章では、人々が自分自身にサービスを提供している公的組織から距離を感じている点を示している。半数以上の OECD 居住者は、政府に汚職がはびこっていると考えている。公的機関への信頼は 2005 年以降低下し、政府の活動について発言権があると考える者は 33% しかいない。

(以上)

(注) 引用にあたっては必ず本文（英語）を参照いただくようお願いします。